

発行日 *** 2013年8月1日 e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

Tel 072-681-8870

一部50円です

無愛想な酒屋

酒飲みの親父を持つと色々と苦勞をさせられる。農作業を終えて親父が帰ってくる夕方になると、炊事を始めた母が「酒があるかみてくれ」と言う。板間の戸棚を開け一升瓶を見る。残りわずかであると、母は「酒がないと機嫌が悪くなるから、すまないけど買ってきてくれと」たのむ。「またかいな」と私はつぶやきながら母から金をもらい籠を持って家を出た。酒屋までは、谷を越え曲がった道を歩かねばならない。道で人と出会っても暗くて誰か分らないような山道をひとり行くのである。

家から半時間ばかり歩くと酒屋の門燈が見えてくる。村の中でも一番と思える門構えと屋敷を持ち、旧家の威風を見せつけるように、田んぼの真ん中を通る道の正面にその酒屋はあった。商売とする酒の看板もなく一枚の張り紙すら見当たらなかった。初めての客であれば途方にくれそうな店なのである。土塀の正面に開かれた扉があって中庭が見えた。しかし、中へ入るのは少しばかり勇気がいる家構えである。

私は、玄関に立って「ごめんください」と声をかける。なかなか家の人が出てこない。二度三度言うと玄関の戸が開き主人が出て来た。私が「長老をください」というと主人は黙って奥に行き長老の二級酒を出してくる。私は、主人も奥さんも嫌いであった。人を見下げた風で貧乏人に売ってやっている、という感じをいつも受けたので、酒を籠の中に入れてと早々に玄関を出た。

一升瓶を背負い夕闇の道を歩きながらも、私は安堵していた。他人に見られずにすんだからである。子供心に酒を買いに行く事が、恥ずべき行為のように思っていたからである。母は、いつも「酒はキチガイ水や」と嘆いていた。父のように毎日晚酌している人は村ではいなかったらしい。

あれから半世紀が過ぎ、酒屋は廃屋になった。酒屋の夫婦は街に出た息子たちに同居を断られ町外の介護施設で亡くなった、と聞いた。今、あの時の主人を思うと私は、当時とは全く違った考えを抱くのである。あの主人は、酒を売ることへのためらいがあったのではないか。村人を酔わせる酒の怖さを知っていたから、出来るだけ売らないようにしていたのではないかと思うのである。ケチで賢いと村で評された主人は、村人たちが想像さえしていなかった酒を売ることへの心の葛藤を感じた故に、あのような愛想のない酒屋の姿となっていたのではないかと思ひ返えすのである。



同性愛 (1)

要人の集まる催しやパーティーで、米駐大阪・神戸総領事のパトリック・リネハンさん(60)に寄り添うのは、夫のエマーソン・カネグスケさん(40)だ。兩人とも恰幅のいい男性。6年前にカナダで結婚したれっきとした夫婦である。

リネハンさんはカネグスケさんを愛するようになってから、自分がゲイであることを公表したいと思ったという。それまでは、同性愛を隠さなければ外交官としても生きていける場所がなかった。その殻を破り一歩踏み出す勇気を与えたのがカネグスケさんとの出会いである。歴代大統領ではじめてオバマが同性婚支持を表明したこともあと押ししたのだろう。

生物学的には男であるが、自分のからだにどうしてもなじめない、違和感があるという人が存在する。そういう男性はおおむね女性よりは男性に性的魅力を感じる。リネハンさんはそのひとりだろう。男としての肉体に違和感はないが、性的には男性嗜好という人もあるだろう。自分の肉体を異性に改造したいという強い欲求をもつ人もいる。

女性の同性愛も同様である。少数とはいえ、同性愛の世界は多様だ。

人間は男と女でできている、なんて二元論はおおざっぱすぎる。(猿)

夢の大阪へ

田舎育ちの私には、「大阪」といえば、はるか遠くの憧れの国だったのです。

初めて街へ出るとなれば、みんな賤別を出した時代。両親の強い反対にあいながらも、私の意思を覆す事なく受験に、父と一緒に大阪へ。

仕事の関係で土地馴れしているのか、父はスーツと宿屋へ入ってゆくのです。そんな姿を見る私は、何かしら父が、特別な人になったよう尊敬めいた気分になってしまったのです。

想像していた大阪駅のホームに降りた時は、十八歳の春でした。長い汽車旅、無言で父と向き合っているのだから、すっかり疲れ果てていました。「明日は受験」と思うだけで、緊張の連続でした。

日本が戦争に負けた年の夏の終わり、信用組合の窓口で、放送を聞き、それからの歲月。

敗戦からの復興、経済成長、時代の進歩と共に行くたびに、どこかここが変化しうろろする事もあれば、その便利さ賑わいに起立してしまふ事もあります。

年と共に、私は90歳を迎えようとしています。大阪駅は老いる事な

く、年々新しくなり大きなビルに囲まれてしまします。

10年後、20年後大阪駅はどんなになっているか、私の想像のカケラは、どこに残っているでしょうか。

顔の見えない相手に

大正生まれの私は、「つづり方の書き方」「手紙の書き方」を教育として受けた世代である。

手紙の常識とは、まず時候の挨拶、先方のご機嫌伺い、その後で自分の事を書く。そして最後に相手方の健康を祈り、男は「早々」女は「かしこ」で締めくくる。

私の友達の中には、物凄い達筆でナフタリンの匂いのような手紙を頂いたのに、此の頃さっぱり、ワープロでいとも簡単になり、私はつい音信不通になつてしまった。悲しいかな、ワープロなんか出来ないのだから。

例えば長い付き合いで、お互いの気心もよく知れている人への手紙は書きやすい。

私は、不器用な人間で、心にならない事は言えず、又、書けない。ありのまま見せて、生きるのが一番楽だから、ごめんなさい。

年齢を知って何の得があるの？

ドライブ、バス旅行、ハイキングな

どで、トイレが見つからなかったり、満員だった時、携帯用排水器バックがあれば、もう大丈夫。使い捨て式でなくて、洗って何回でも使用出来て経済的、ゆれる車内でも落ち着いて使用、男性用、女性用と使いやすい形状。ふたは漏れないロック式。これでトイレの我慢を解消。チラシを見てすぐに電話で注文する。

お互いに顔は見えなくても、はっきりした声で全てを把握したつもりでいた。相手は応対なれしていて最後に言った言葉が神経にさわった。「失礼ですが、年齢は」

「八十八才です。そして女性、サイズが必要なのですか、それとも色ですか」途切れた。

「送料共発送は10日前後です」ブツン。

何もそんな事を絞り出してまで考えて怒らなくてもいいじゃないか、と言われそう。これが私の性なのか。



俳句

土田 裕

風の道ここぞと決めて昼寝かな
湯の宿の化粧水とてへちま水
盂蘭盆会にわか仕立ての僧来る
蛸や出湯ゆたかな峡の宿
出勤の軽き足どり今朝の秋

編集後記

残暑お見舞い申し上げます。
長く連載させて頂きました土田さんの「私の海外経験」が今回で一応終了します。私が学生時代に夢に見た商社マンの海外駐在の様子がよく分かりました。

駒田さんの「思い出のグリーンガラス」を読んだ読者から、早速YOU TUBEで見たと聞きました。死刑反対運動の音楽に使われているそうです。

AOさんの年金問題は反響が多く、意外と知らなかったという人が多かったです。

今回、初めて中原さんが投稿していただきました。

都合で「闘病記」は次号に掲載します。
(嘉)

暑い夏ですから怪談もどき

私は、いままでの長い人生でユーレイを三回、エクトプラズム（白い雲みたいなものがシウルシウルと足元を動いていった）を一回、見た経験がある。

平均的日本人として、これが多いのか少ないのか、よくわからないが確かに見た（と思う）。四回とも、お酒は一滴も入っていない。エクトプラズムを見たのは中学生だったし。

ユーレイのうち、一人は死んだ父だったので、怖いという気持ちは全然なくて、「えーっ？」とびつくりしただけだった。そして、嬉しかった。だって、ユーレイのくせに父ったら、やたらニコニコしていて上機嫌だったから。そして、私の肩に両手を置くような感じで、「お母さん（自分の妻）をいじめたらアカン」とだけ優しく言っただけで消えてしまった。人聞きが悪いことこのうえない。まるで、私の実の母をいじめてでもいるようだが、そのころ、母はまだ若く、今でもそうだが、自分の産んだ娘におめおめいじめられているような婆さんではないのだ。わざわざあの世から来てまで言うことかと思うが、「お母さんを大事にしたってや」ということだろうと理解しておいた。

その言葉より私は父が最上級のにつこに顔だったことが、嬉しかった。それ以来、父のことで後悔したり、自分を責めるのを止めた。あんなに機嫌よさそうなんだから、五十九歳でガンなんかで死んで可哀そうとか、もつと優しくしとけばよかったとか、思わなくてもいいinchやうん、と気が軽くなった。

ほかの二件は怖かった。一つは、三重県のさびれた観光地にある池のそばで、鼠色のみずぼらしい着物、筒袖というのだろうか？ 下級武士か農民が着るようなものを着た瘦せたお兄さんたちが七、八人、群がっているところが一瞬、見えた。その瞬間に突然、腰から下、足がガチンガチンに固まってしまったようになって、ロボットみたいな歩き方でしか前に進めなくなり、やっと五〇歩ぐらい歩いたところで何事もなかったようにすっと治って歩けた。今、思い出しても、不思議なぞつとする経験だった。そのお兄さんの一人が、軽い敵意を込めて、「あっちへ行け」と言ったような気がする。声を聞いた覚えはないのに、「こつちを見るな」と冷たく言われた、そういう印象を受けた。

このとき、母と姉が一緒だったが、二人には何も見えず、異変もなかった。だから、私の気のせいかもしれない。

「気のせいかもしれない」というのは、正直、嘘だ。「これを書いているひと、おかしいんじゃないの」と思われたくなくて、

つい書いた。あのとき確かに、足が前にでなくなつて、重くて重くて「どうしたんやろ」とすぐく不安だったのに、そこを離れたとたん、すーっと正常になった。「憑きものが落ちた」とはこのことか、と思ったのは、ずつと後になってからだ。

もう一つはもつと怖い。大阪の阪神高速道路の下、中央大通りをタクシーで走っていたとき、交通事故の現場を通り過ぎた。パトカーと事故車が見え、その横を通り過ぎた瞬間、前の方がぐちゃぐちゃに壊れた事故車の後部シートで笑っている二人の子供を見た。

「後の席で子供さんが笑ってましたから、大丈夫みたいですね」とタクシーの運転手さんに言ったら、「えっ、誰も乗ってませんでしたよ」。

「えっ！ 乗ってましたよ」「いや」「でも、確かに二人……」「警察が来てるのに、事故車に子供乗せておきませんわ、お客さん」。これは怖かった。

今、思い出しても怖い。あの二人、十歳ぐらいの男の子ともう少し小さい女の子だったような気がするが、兄妹か？ 事故が面白くてたまらないという感じで笑いあっていたが、その笑顔に心底、ぞおーっとした。成仏してほしい。わざと事故を起こしたり、それを喜んだりしてちゃだめだ。

以上が私のユーレイ体験のすべてで、一生これだけで十分だと思っている。

なぜならば、私はとてもこわがりだからだ。どれぐらいこわがりかというところ、ゴミ回収日に、よそ様のゴミ袋にうつかり足を引っ掛けたことがあつて、そのとき、何かごろんとしたものが足に当たった。まだ、黒いゴミ袋が使えていた時代の話なのだが、そのごろんが、私には「に、人間の胴体？」に思えた。もちろん、そのまま放置し、逃げるように会社に行った。そして、会社の子に「さっき、ゴミ袋にけつまづいたんやけど、入ってたん人の胴体かもしれへんねん。ごろんとしててん。そのまま放つて逃げたけど」と言ったら、その子はカラカラと笑い、「わかります、そういうゴミ袋、あります、あります！」と言った。普段から、他人の言うことに異を唱えない如才でない子だけど、「そうか、よくあるのか」と何故か、ほっとした。その後、しばらく警察が調べに来ていないか、何となく気にしていたが、何事もなかったので、バラバラ殺人事件ではなかったと判明した（実際は、すべてがゴミとして回収されてしまい、事件として発覚しなかっただけ……ということではなかったと思われる）。

それに似たような（？）ことで、母も怖い体験をしている。弟が結婚する前、しばらく母と弟は二人で暮らしていた。ある日、自分の部屋がある二階から弟が降りてきたのだが、そのとき古いバスタ

オルにくるんだ何かを腕に抱くようにして持って降りてきたらしい。大きさは新生児ぐらい。弟は、それを自転車の前かごにそっと置くように入れた。

弟は二十代後半で独身。母と暮らしているから家賃もいらないうし、結構、自由で、弟は遊び歩いてきた。「草食男子」などという言葉がない時代のこと、弟はせっせとその時付き合っている女の子と一緒に海へ行ったり、山へ行ったりホテルへ行ったりしていた（多分）。それを知っているから、母は弟が前かごに入れた荷物に震え上がった。「赤ん坊……」。それも死んでいる赤ん坊。弟の子供。女の子のお腹が大きくなっているのに、適切な手を打たず、月満ちて。

母は弟が二階へ戻った後、おそろおそろバスタオルを開いた。「私はてっきり、あの子（息子）がどこかの娘さんに……」「中身何やったん？」「なんも。」「おくるみ」みたいに畳んであっただけ。ひと騒がせな子オやわ（笑）。ひと騒がせは弟でなく母である。妄想っぷりが怖いよ、お母さん！（AO）

百足の呪い

中原節子

鶯の声の明るき神の森に

百足退治の物語さく

母の呪文信じて生きて八十年

その御社に拍手を打つ

さわやかな五月が過ぎて、うつとうしい梅雨入りの頃になると、山裾の家々には無気味なお客さまが必ずやってくる。ゾロゾロと、湿気の多い浴室だけでなく、寝床の中や、衣服に靴の中にひそんでいた、顔を這ったり、所かまわず動き廻ると云う毒虫の百足である。

幼い頃から、今でもとても怖い。この時期が来るといつも両親が幼い私達に心配りをしていた。「百足はどこに行っても裸足で便利だなあ。人間のようには外へ出る時、靴を履くとしたら時間がかかってえらいことだで」。その頃、父のユーモアがとても嬉しかった。「百足はなあ、毘沙門天と云う神様のお使いだけなあ。殺したらいけない。知らんふりをして逃がしてやれよ」。両親の教えでもやっぱ怖い。十五センチぐらいの大きい百足を見ると思わず「キヤー」と声が出る。びつくりする。あわてる。嫌で泣きそう

になる。百足も、ゾロゾロと逃げてゆくが、幼かったなあ。

そんな或る日、百足に噛まれない呪いを母から教わった。

昔々、三朝のずつと奥の俵という村に、大きな大きな百足が住んでいて、毎年村人が襲われて大へん困り果てていたそう。ある日、見知らぬ男がやって来た。見るからに強い、藤太と名のる大男だ。村人達は、大歓迎です。早速百足の話を聞いてもらい助けを求めた。藤太はその強力と才智をもって、物の見事に退治した。大きな大きな物百足であつた。そのお手柄は高く評価され俵藤太さまと敬われ大切にされた。誠に村の宝物であつた。俵村は平和に時が流れた。村人達は俵藤太さまを御神体として神社を建立した。

その噂を聞いて方々から信仰の人が、たえずに参詣したと云うことだ。

俵神社の家紋は丸に十文字。

母は「タワラトウタのモンドコロ」と、

となえながら、右手で宙に大きな十文字をかき、その十文字を左から大きく丸をかいてかこみ立派な力強い神社の紋にしていた。これが百足に噛まれない呪いだそう。な。「いつでもどこでも危険に逢わないように丁寧にと覚えて守ってもらいなさい」と話してくれた。私は、迷信だと云って一笑することもなく、ずっと信じて百足の活動期には、忘れず続け

ている。お蔭さまで噛まれた事がない。とても有り難いと思っている。

気がかりだった永年の念願が叶つて、娘と俵藤太の神社に参詣した。山の静寂に鎮まる神さまに安らぎ感動し畏敬の念に炎えた。

二人の拍手の音が高く澄みきつた空気にふれた。嬉しかった。何回も何回も参詣しよう。秋がいいな。吾が八十路の坂に思索し、小さな夢を追いつながら元氣よく生きてゆきたい、と念じている。合掌。



B級サラリーマン渡世譚 その3

いよいよ輸出部生活がスタート2

明石 幸次郎

元商社マンのT畑さんが続けて曰く「俺も、何で工場の資材の奴から、そんな貿易の専門用語がいきなり出ると思わなかった。ちょとは、賢い奴？も工場にもおるんやなあ、とビックリして、お前の言うようにM社にボールを投げるのが、営業としてやらないとアカンと咄嗟に思ったわ。あの時の会議は5分位で終わってしまったので印象に残って、お前の顔も覚えてるわ。工場でのクレーム会議は、普通は2時間位掛けて、夫々の部門が言い逃れとか、言い訳して、時間だけが経ち、し



あ

かも営業が欲しい、工場としての結論は出ず、各部門で再度、原因の調査をして次回に又、会議——というのが、多いわなあ。まあ、あの時のクレームは、保険が下りて、明石の言う通りになったが、その前に、お前から結論はどうなったかということ、俺に電話で聞いてきたなあ。直接、工場資料から、クレームで督促の電話を受けることは先ずなかったわ。こいつは、ちょっと根性のある奴やなあ。と思ったわ。それにしても、お前も今度はエライ課に来たもんやなあ。このAさんは口が悪く、何でも思ったことをはつきり言うおっさんやから、何を言われてもあんまり気にしたらアカンで。言われたら、ちよつとは言い返さなあ、大人しくしていたらアカンということや！まあ、頑張れよ。」と言って自席に戻って行った。

T畑さんとA課長の柄の悪い、フラシクな会話は、以前の職場とは全然違う雰囲気であった。転勤の挨拶をしただけの第一印象として、T畑さんが予想外に多少は褒めて貰った？こともあり、自分に合っている職場ではないかと、楽観的な思いを持った。

上司になるA課長はT畑さんが戻った後も「お前、T畑にM社に文句を言えと言ったんか？それで、タイからのクレームは全損になって保険で求

償出来たんか？」と続けて質問され「T畑さんが今も言われましたが、全損扱いになって、私がいたS工場は、輸出部に迷惑掛けたと言つて、関係協力会社2社に5万円づつ出してもらいました」A課長は「ほう、一社500万円が5万円になったんか？それにM社の保険で求償させたんは、エエこつちや！協力会社も工場長も喜んでたやろ。工場の資料の奴は普通、問題があったら何でも協力会社に押し付けるのと違うのか？」と、何故かこの話題に興味を持って、工場の対応にまで質問が及んだ。「一方的に協力会社に押し付ける事はないですが、問題が協力会社に責任があれば、クレーム費を負担してもらいますが——」それに対し「ホンマかいな？建前はそうやけど、最終的には資料の奴は発注権を振りかざし、何でも押し付けるのと違うのか？」と営業から感じる工場のやり方に率直な反論を受けた。

この人には、建前だけで応えても本音を見抜かれて、元商社マンからアホ扱いにされると、B級サラリーマンにもB級なりのプライドもある。これからは、嫌でもこの人の下で何年かは働くことになるので軽く見られたら困ると思い、自分の本音を言う方がこの人には受けると思う、「T畑さんからのクレームはエンジンの燃料タンクが何千

台か錆びたので、S工場の品質管理に問題があると思われるので、弁償せよ」という内容でした。それも金額が1千万円という額で、タンクを製造した協力会社と、それを塗装した協力会社に夫々500万円づつ弁償させれば、2社とも潰れます。そんな無茶なことを押し付けると、今度はこちらが困ります。部品が入ってこない工場は生産が出来ません。確か、今回の転勤になる前に、イラン向けのエンジンの1万台程の短納期の大量受注で羽田空港に（当時は成田空港はまだなかった）、イランエアの貨物ジャンボ機が3機も駐機しているので、一分でもエンジンの積みこみが遅れ、そのために、出発が遅れると、分単位で何百万円のペナルティを掛けられると言う大変な案件がありました。これもその2社に無理をして納期に何とか間にあわせてもらいました。特別無理を効いてくれたのは、その前にあったこのタイ向けのクレーム処置があったからだと思います。本当に出荷まで毎日出来高報告を確認して大変でした。協力会社と資材とは持つ、持たれつです。

況して、錆びの問題の原因は、現地タイでの屋外か屋内かの保管状態、船舶のオンデッキか、船内かの積荷の状態、梱包の状態、梱包材の含水率の状況など、協力会社の製造過程以外の要

因で錆が発生することも考えられました。それに、私が担当する以前から同じ燃料タンクを何万台もタイ向けに出荷していました。これらが、錆びが発生したと言うクレームは過去にありませんでした。今回の問題のロットも協力会社2社は何ら工程変更、材料の変更、作業員の変更もなかったということもあり、協力会社にS工場の検査課長と出向き、調査した結果です。勿論これらは、私がT畑さんに会議でM社に保険求償をして下さいと言った後、調べた結果でした「——」と少し長くなったかなあとA課長の顔を伺いながら答えた。それに対し、「そうか、まあ、メーカーの間も大変やなあ。」

資材なんか業者に接待してもらい、盆暮れにデパートから贈り物が届き、エエ部署と違うのか？エエ、お前も資材でイラン向けの部品もやってたんか？あれば、輸出处も大変やった。イランはこの課でやってるんや。Kが中近東とアフリカをやってるんや。だから、イラン向けはKが決めてたんや。おい、Kよ。今度、ウチに来た明石や。紹介しておくわ」と次にKさんを紹介してもらった。中々、肝心の自分がこの課で何処の国を担当して何をするのか、まだまだ、そこまでは話が行かなかった。（続）



色づけされた地名

大江雉兎

先日、東京の上野駅がニュースになっていた。なんでも開業百三十年を迎えたとかで、七月二十八日には朝から十三番線の発車ベルが「あゝ上野駅」になった云々。上野駅十三番線と聞くと、そのトイレが「迷惑行為」の有名スポットだということの方に頭が行く人々もいるようだが、より広くに通用する認識は「あゝ上野駅」のイメージであるに間違いない。

ニュースの中でも触れられていたように、集団就職で上京してくる若者が下りたつ最初の東京といったカラーである。その世代に属さない私などは実感でイメージするのは難しいが、知識のレベルでいえば上野駅＝集団就職のスタート地点という等式があることは理解できるし、「あゝ上野駅」がそうしたカラーを象徴的に表現する流行歌であることも知っている。そして、固有名詞は特定の色彩を帯びるということの代表的なケースが、カッコ付きの「上野」であるとも考えている。

昭和三十九年の「あゝ上野駅」には実感は伴わないと書いたが、そこに描かれたものと逆のベクトルを持つ「上野」であれば理解できるものがある。昭和五十二年リリースの「津軽海峡・冬景色」に描かれた「上野」である。

上野発の夜行列車おりた時から
青森駅は雪の中

で始まる歌詞からは、東京から故郷へという物理的な意味での逆ベクトルだけでなく、都会に対して抱いていた夢にも裏切られ、ボロボロになって故郷に帰るといった心情面での逆ベクトルも見えてとれる。入口は常に出口でもあるとすれば、「上野」はそれを地で行く地名のようだ。「金の卵」と呼ばれた若者たちにとって「上野」は夢への入口だったかも知れないが、上京した者がみな幸福にありついたらわけでもない。成功するものがいれば夢に破れて落ちてゆく者もいる。そんな落ちていく人々の側から見れば「上野」は退場の出口なのである。「あゝ上野駅」の一節にある、

上野は俺らの心の駅だ
くじけちゃいけない人生が
あの日ここから始まった
というフレーズと並べてみると「津軽海峡・冬景色」の

北へ帰る人の群れは誰も無口で
海鳴りだけをきいている
という一節は、そこに描かれた情景の凄惨さを否が応でも浮かび上がらせる。

ところで、石川さゆりのディスコグラフィイを見ると「津軽海峡・冬景色」のあと、いわゆるご当地ソングに分類されるシングル曲が続く。「津軽海峡・冬景色」が想像以上にヒットした

ことをうけて、レコード会社による二匹目のドジョウ探しであるのは明らかである。しかし、セールス面での成績がどうだったかはいざ知らず、「津軽海峡・冬景色」に比べると後続の「能登半島」「暖流」「火の国へ」で用いられた地名はことごとく精彩を欠く。「津軽海峡・冬景色」を含め、すべて阿久悠の仕事なのだが、歌詞の中身からはその地名でなければならぬ必然性はまるで見てとれない。極論すれば、まったく関係の無い土地の名前を代わりに放り込んでおいても、取り立てての破綻は来さずに歌詞が成立してしまうのである。「津軽海峡・冬景色」のインパクトが大きすぎるがゆえに、それと比べてはどうにもならないというのが実際であるにしても、文字面だけでも地方色を出しておけば売り上げが伸びるだろうといった思惑さえ透けて見える。

少し見方を変えれるとすれば「津軽海峡・冬景色」が形式だけのご当地ソングではなく、独特に色づけされた固有名詞（地名）を通して時代を絶妙に切り取った、「時代の歌」たり得たのに対し、以降のシングル曲は現代でも行われているご当地ソング戦略になってしまったと評することもできそう。ご当地ソング戦略はひとたび軌道に乗れば安定したセールスが継続的に見込

めるという話なので、ビジネス面での当否は議論の余地はあるにしても、ゼニカネを抜きにして歌詞の出来映えをみるとすれば底の浅さは隠しようがない。

私の海外経験 21

豪州時代5（'86年10月～'90年5月）

子弟教育

土田 裕

シドニーに家族が到着したのは一九八六年の一月であった。娘はその年の春、帰国子女枠で東京学芸大附属大泉高校に入学していたので、半年で退学して豪州へ行くことには本人は抵抗したのだが、一人で日本に置いておくわけにも行かず、無理に豪州へ連れてくることになった。シドニー郊外にある有名私立高校、ピンブル・レディスカレッジで父兄同伴で面接を受け入学した。日本と違って新学期は七月から始まっており一年には編入してくれず、とりあえずジュニア・カレッジ三年に編入され、翌年またシニア一年生から学習することになった。息子は中一だったので全日制の日本人学校の同学年に編入してもらった。

子供が高校生の場合、大学進学のことを考えると日本に置いて赴任する人も多かったが、言葉の問題はないので現地校に通わせるのも本人には良い経験になると私は考えた。

クリスチャンの私立女学校で評判は良かったが、日本の私立高校と違って授業も難しくなくあまり勉強もしていないようであった。一九九〇年、私に転勤命令が

でたところ、彼女も高校を卒業したので帰国子女枠で慶応大学に願書を出すよう言

は推薦されず、社会科学部しか入れなかった。それで就職に苦労することになった。私自身は会社の仕事で忙しく、子供の教育については女房に任せきりだったが、会社の同僚も事情は大同小異だったので、結局はそれぞれの子供の能力と努力に期待する他ないのだと思う。

家族旅行

対して、結局、慶応を受けさせることになった。帰国子女枠での受験はToefl(英語)、SAT(米国の大学入学適性試験で3科目)の成績と論文試験だけで合否判定される。法学部と文学部に出願して文学部だけ合格した。受験勉強らしいものは全くしていないのでやむをえないのだが、4年後の就職活動の際、折からの不況も相俟って文学部では就職先が全く無く大変苦労することになった。高校時代に日本の学校で履修する学科を全く習っていないので常識に欠けるところがあり、それでも大学で心機一転勉強すればなんとかなったと思うが、大した勉強もせず遊んでいたせいもあると思う。

息子は日本人学校の中三になって、同級生が塾に通い出したので、彼も週2・3回は塾に行っていた。彼はこれも帰国子女枠で桐蔭高校、早稲田実業高校に合格したが本人の希望で早稲田実業に入学した。こちらも高校の成績は芳しくなく、卒業の際、早稲田の政経学部、法学部に

るホークスベリーと姉妹都市の表敬訪問に来られて同行したことがあるが、ここも海が山間に入りこんだりゾート地で夏場は地元の観光客で賑わう。

豪州大陸には他の大陸にはいない動物が多い。カンガルー、コアラ、襟巻トカゲ、ワラビー、タスマニア・デビル、カモノハシなどである。シドニー市内のタロンガ動物園に行けばこれらの動物がすべて見られる。カンガルーを除いて豪州の動物は小さいものが多く、襟巻トカゲやカモノハシなどは檻の中をのぞいてもなかなか見つけにくい。一時TVのCMで襟巻トカゲが立って走る姿が評判になったが、実物は10cmくらいで襟巻も開いておらず立ってもいないので面白くない動物ではあった。

カモノハシも両生類だが通常は水の中にいるので見つけにくく体長20センチくらいの小さな動物である。その点、コアラは見える場所に沢山おり、じっとして動かない姿が可愛いので観光客に人気がある。鳥類ではクッカバラ(笑いかワセミ)が拙宅のベランダにも時々飛んできて奇妙な鳴き声で鳴いていた。日本のカワセミとは違って体長20センチくらいの大きな鳥でこげ茶色をし

ていた。家の庭に大きな緑色のトカゲが恐竜のように前足で立っていた時は吃驚した。日本にはあんな大きなトカゲはいない。

不動産バブル

私が豪州にいた一九八六―九〇年、日本はバブル景気に沸いており、新聞紙上で堤義明氏が世界一の金持ちとして紹介されたがこれも西武グループが持つ不動産価格が暴騰したためであった。また日本の不動産業者が豪州のリゾート地を買いまくり別荘やマンションを売り出していた。個人でもシドニー近郊の家を買いに来る人が押し寄せ、住宅価格がどんどん高くなり響壁を買い事態となっていた。

三井物産もクリストファー スケースなる人物と組んでゴールドコーストに高級リゾートマンションを開発し売り出したが、発売時期が遅すぎたのと価格が高すぎたため、なかなか売れず、そのうちパートナーの会社が倒産したため100億円超の大損を出すことになった。

一九八八年秋ごろから昭和天皇の病状が悪化し、全国に自粛ムードが広がったため、豪州産の海老の輸出が激減しブリスベーンの海老の養殖業者が倒産して、これなど豪州がいかに日本経済に依存しているかを示す一例であった。一九八九年初頭には昭和天皇が亡くなり、秋には

ベルリンの壁崩壊をTVで見えて世界が
急激に変わりつつあることを痛感した。
一九九〇年五月には日本へ帰任する
ことになったが、当時すでにバブルは崩
壊しつつあり一〇月には日経平均が九
カ月で半値（2万円割れ）に下落した。
その後長い不況が続き二〇一二年5月
現在では株価は九千円前後に低迷して
いる。（了）

「JET STREAM」

Narration by
Tatsuya Jouu
（BGM: Mr. Lonely）

駒田 明克

遠い地平線が消えて、深々とした夜の
闇に心を休めるとき、はるか雲海の上を
音もなく流れ去る気流は、たゆみない宇
宙のいとなみを告げています。

満天の星をいただく、はてしない光の
海を、ゆたかに流れゆく風に心を開け
ば、きらめく星座の物語も聞こえてく
る。夜の静寂（しじま）のなんと饒舌な
ことでしょうか。

光と影の境に消えていった、はるかな
地平線も瞬にうかんでまいります。
日本航空があなたにお送りする、
音楽の定期便、ジェットストリーム
皆様の夜間飛行の相伴をいたします
パイロットは城 達也です。

みなさん、以前ジェットストリーム
というラジオの番組を聴かれたことお
ありですか、聴かれたことがおありの
方は、城 達也さんのこのナレーショ
ン、きつと、懐かしく思い出されたこ
とでしょう。

ジェットストリームは、T O K Y O
F Mの音楽番組。初回放送は1967
年7月3日、当時、既に「ローマの休
日」など数多くの映画で世界的に人気
を誇った名優グレゴリー・ペックの吹
き替えでも有名な城 達也氏が初代パ
ーソナリティに抜擢されます。

番組は毎週、月曜日から金曜日深夜
0・00～1・00放送でした。城 達
也さんの穏やかで心地よいナレーショ
ンは多くのリスナーを魅了し、ジェッ
トストリームを長寿ヒット番組に押し
上げ、1994年12月末まで27年
間7、387回の放送を一度も休むこ
となく、語り続けました。

オープニングのBGM『ミスター・
ロンリー』が流れ、この有名な、城 達
也さんの「遠い地平線が消えて、…」
のナレーションは最後まで同じでし
た。

放送開始当時は、まだ飛行機に乗っ
て世界各地へ自由に飛び回れるなど、
我々にとつては、憧れの世界でした。
深夜0・00になり、ラジオのFM
放送から流れてくるジェットストリー

ムを聴くと、遠い外国についての、お洒
落で、センスの良い、気の利いた短いナ
レーションが曲と曲の間に流れ、そんな
外国に行ってみたくなる誘惑に駆られ
たものでした。

オープニングの曲は『ミスター・ロン
リー』でフランク・パウセル・グラン
ド・オーケストラの演奏によるもので、
まさに名演奏です。

番組のなかで流れるメロディーは7
0年代に全盛を極めたイージーリスニ
ングの数々です。ポールモーリア、バー
シーフェイス、カラベリ、フランク・プ
ールセル、レイモン・ルフェイブル、1
01ストリングス、リチャード・クレイ
ダーマンなど、大人のための夜のくつろ
ぎの時間を演出する軽いジャズ系の曲
も、すてきでした。

エンディングのナレーションは、

夜間飛行のジェット機の翼に点滅す
るランプは、遠ざかるに連れ次第に星の
瞬きと区別がつかなくなります。お送り
してますこの音楽が、美しくあなたの夢
に溶け込んでいきますように。ではまた
午前零時にお会いしましょう。お休みな
さい。

日本航空がお送りしたジェットスト
リームそろそろお別れの時刻が近づい
てまいりました。
皆様のお相手は、わたくし、城 達也で

した。

そして、最終回の1994年12月末
の放送でのお別れのナレーション

日本航空がお送りいたしました、ジェ
ットストリーム、そろそろ、お別れの時
間が近づいて参りました。皆様のお相手
は、わたくし、城 達也でした。

25年間、わたくしがご案内役を務め
て参りましたジェットストリームは、今
夜でお別れでございます。長い間本当
に、ありがとうございました。

またいつの日か、夢も遥かな空の旅で
お会いしましょう。そして、来年（19
95）1月2日からは、装いも新たなジ
ェットストリームが旅立ちます。

夜間飛行のジェット機の翼に点滅す
るランプは、遠ざかるにつれて次第に星
の瞬きと区別がつかなくなります。

お送りしておりますこの音楽が、美し
くあなたの夢に溶け込んでゆきますよ
うに。

では、皆さま、さようなら。

城さんの最終回、懐かしい青春の思い
出と一緒に思い出されます。2ヶ月後夜
空にまたたく星となられました。享年6
3歳。

是非、インターネット（You Tu
be）でナレーションをお聴き下さい。